

関西とラテンアメリカ

桜井 悌司

41年間勤務したジェトロ（日本貿易振興機構－JETRO）を退職し、2008年4月から、関西外国語大学で教鞭をとっている。大学では、ラテンアメリカ事情やスペイン語の授業を受け持っている。大学赴任直後に気がついたことは、ここ関西では、ラテンアメリカの最新情報の入手が容易ではないということであった。語学の先生や特定のテーマについて研究している先生であれば、ラテンアメリカの最新情報をそれほど必要としないが、スペイン語やポルトガル語をラテンアメリカと結びつけ就職活動に繋げようとする先生にとっては、情報入手に苦勞する。東京にいると、ラテンアメリカに関する経済・投資セミナー等が頻繁に開催される。ジェトロ・アジア経済研究所、JOI（海外投融資情報財団）、経団連（日本経済団体連合会）、日商（日本商工会議所）、金融機関、新聞社、米州開発銀行、ラテンアメリカ協会、日本ブラジル中央協会、その他国別二国間友好団体等々主催者は数え切れないほど存在する。加えて、在京の各国大使館も積極的にセミナーや各種イベントを組織している。文化・学術関連ともなると上智大学等多くの大学で組織されているし、スペイン政府の言語・文化普及機関であるセルバンテス協会の施設では、毎日のごとく文化イベントが行われている。しかし、関西では事情は異なる。ラテンアメリカに関する「人」、「情

報」、「機会」が激減するのである。私の印象では、東京と比較して、5分の1あるいはそれ以下である。その理由は、いろいろ考えられる。まず第1に、大阪や関西は、距離的にも経済的結び付きにおいてもアジア志向であり、ラテンアメリカに対し、その経済力や文化力にふさわしい関心を向けていない。第2に大阪に本社を置く企業の減少にともないラテンアメリカ・オペレーションはほとんど東京や米国で行われるようになった。第3に、ラテンアメリカ駐在経験者の大部分が帰国後東京勤務となり、名古屋と比較しても大阪勤務者は非常に少ない。第4は、大阪には、名誉総領事館しか存在しない。

例えば、2013年度と14年度4～5月に、ジェトロ東京とジェトロ大阪が開催したセミナー数を見てみよう。13年度は東京では、メキシコ、チリ、コロンビア、ブラジル、ペルー等10回、大阪では、上記国々のセミナー5回、14年度は、東京ではブラジル、メキシコ等6回、大阪は0回となっている。これは、ジェトロだけの数字であるが、東京では、前述のように数多くの組織がラテンアメリカ関連のセミナーやイベントを主催している。大阪でも、最近ジェトロ以外の組織、大商（大阪商工会議所）、関経連（関西経済連合会）、東京三菱UFJ銀行、東洋経済新報社なども主催しているが、まだまだ少ないと言える。



大阪でのフィエスタ・メヒカーナの光景
（筆者撮影）

文化面を見てみると、毎年、ブラジル映画祭やラテンビート映画祭が大阪や京都でも開催される。フィエスタ・メヒカーナも毎秋、梅田で開催され、かなりの賑わいを見せる。毎年5月に開催される「神戸まつり」のメイン・イベントである「サンバ・カーニバル」も数多くの見物客を集めている。その他、タンゴ、ボッサノヴァ、レゲエ等音楽イベントは各地のライブハウスで時折開かれているが、数少なくかつ大阪、神戸、京都等でそれぞれ行われている。

姉妹都市もそれほど多くない。大阪府は、大阪市－サンパウロ等3件、京都は、京都市－メキシコ・グアダラハラ市等2件、兵庫県は、兵庫県－ブラジル・パラナ州、神戸市－リオ・デ・ジャネイロ市等4件のみである。ミッションの相互派遣が主要業務である。

二国間等の友好団体をみると、神戸にある（財）日伯協会（1926年設立）は会報の『ブラジル』の発行、神戸まつり、中南米音楽会、ブラジル・ポルトガル講座、海外移住と文化の交流センター事業等

を行っている。大阪サンパウロ姉妹都市協会の活動も活発である。4年前からポルトガル語スピーチコンテストが開催され、少年フットサル教室等積極的な活動を展開している。

関西に総領事館を置いているラテンアメリカ諸国はパナマ（神戸）のみである。名誉総領事館を見ると、大阪には、メキシコ、チリ、パナマ、ボリビア、神戸には、ブラジル、コスタリカ、コロンビア、ジャマイカ、ホンジュラス、京都には、メキシコ、ニカラグア、ペルー、パラグアイと3都市に散らばっているのが特徴である。

英国政府の言語・文化普及機関のブリテイッシュ・カウンシルによると、英語を除く外国語の中で重要度ベスト10は、スペイン語が堂々1位で、2位アラビア語、3位フランス語、4位中国語、5位ドイツ語、6位ポルトガル語と続いている。現在、関西在住の大学でのスペイン語とポルトガル語教育の実情をみてみよう。スペイン語を専攻とする学科を持っている大学は、大阪大学、神戸市外国語大学、京都外国語大学、関西外国語大学である。専攻ではないが、伝統的にスペイン語を重視している大学として京都産業大学と天理大学が挙げられる。その他の大学は、第2外国語、第3外国語として学ぶことになる。ポルトガル語を専攻とする学科を持つ大学は、大阪大学と京都外国語大学の2校のみである。ラテンアメリカという名前の付く研究所を持っているのは、京都外国語大学の「京都ラテンアメリカ研究所」と関西外国語大学の「イベロアメリカ研究センター」のみである。京都外国語大学は、年2回の「ラテンアメリカ教養講座」

やシンポジウム・セミナーを行うほか、『研究所報』や年1回の『研究所紀要』を発行している。関西外国語大学は、2009年より13年まで公開講座「ラテンアメリカ・リレー講義」を毎年開催していたが、14年に廃止された。ラテンアメリカ研究で定評のある神戸大学では、経済経営研究所の中に「ラテンアメリカ政治経済研究部会」、天理大学では、「アメリカス学会」の中でラテンアメリカの研究も行っている。

最後に、関西の企業や一般市民がラテンアメリカに関心を持ってもらうにはどうすればいいかを考え、いくつかの提言をする。

提言1 ラテンアメリカに触れる機会を可能な限り増やす

やはり大阪や関西でもっとラテンアメリカに触れることができる機会を増やすべきであろう。そのためには、関西が一丸となって、関西の経済的・文化的重要性につき、東京にアピールする必要がある。在大阪・京都・神戸の地方庁、関経連、商工会議所などが在京の政府官庁、政府関係団体、経済団体、大使館、二国間友好協会等に普段の働きかけを行うことが望まれる。在京のラテンアメリカ各国大使との定期協議なども検討すべきである。なぜなら、昨今、大使館なども文化・経済広報活動に積極的展開しているからだ。関西でのイベント等が計画される場合には、上記組織は積極的に協力・支援する意思を示し、ジェトロ、商工会議所、関経連、その他経済団体、NPO等が迅速に準備を整える体制をつくる必要がある。ただ、関西では、大阪主導は必ずしもうまく機能しないので、特に

大きなイベント以外は、大阪、京都、神戸のそれぞれの都市での機会をつくるべきであろう。今秋にジェトロが京都に事務所を設置する計画であり、設置後は、大阪、神戸、京都のジェトロ事務所が経済・貿易・投資情報の木目細かい情報提供をすることになる。



関西外国語大学リレー講義で講演するチリ大使
(撮影：関西外大広報室)

提言2 ラテンアメリカ関連情報を共有するメカニズムをつくる

東京だとラテンアメリカ協会や二国間友好関係団体等に入会したり、セルバンテス協会のメーリングリストに入れてもらえば、東京で開催されるラテンアメリカ関連の経済・文化セミナー、展示会、コンサート等の情報が容易に手に入る。しかし、大阪や関西ではそうはいかない。各種イベント等の情報を収集・集中・提供する組織が存在しないからである。関西地区のイベントはそれほど多くないので、そのような機能をつくることはそれほど難しくないと思われる。例えば、ラテンアメリカ協会のような組織に情報を集中させ、ホームページ上で紹介すれば解決できよう。

提言3 ラテンアメリカに関心を持つ地方政府、ビジネス、大学の関係者が集まり、意見・情報交換する場や機会を増加させる

大学関係者の間の意見交換の機会、学会等があり比較的存在す

るが、ビジネスマン、地方庁、団体、企業間の意見・情報交換の場はまだまだ少ない。どういう形式であれ、そのような場が多数生まれること期待したい。筆者も小さな試みとして、2010年5月に「ブ

ラジル中南米勉強会」を立ち上げた。大学教授、大阪府、経済団体、メーカー、商社、不動産、保険等の分野から30名が加入している、年2回くらいの頻度で集まり、参加者や外部のゲストにあらかじめ

決められたテーマについて話してもらい、意見交換するというものである。同様の組織が関西地区で増加することを期待したい。

(さくら い い 関西外国語大学教授)

ラテンアメリカ参考図書案内



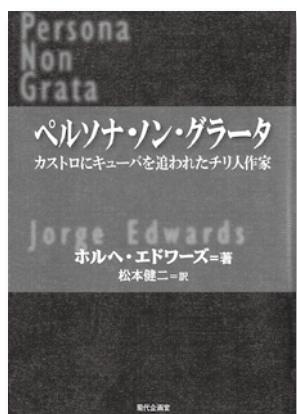
『ウーゴ・チャベスーベネズエラ革命の内幕』

ローリー・キャロル 伊高浩昭訳 岩波書店 2014年4月 296頁 3,500円+税

20～21世紀のラテンアメリカでその個性で最も影響力を発揮したのはカストロとチャベスであろう。1992年に陸軍中佐として軍事蜂起し失敗、98年の大統領選挙で当選して以来、ベネズエラはこの救世主となるか、夢想家に過ぎないか「大統領政庁を演劇の舞台に変えてしまった巨人、野次・喝采を浴びせる騒がしい大観衆」の中で彷徨ってきた。

著者は英ガーディアン紙のカラカス通信員を務め、綿密な取材とインタビューで冷静にチャベスの生き方、陳情処理を直接テレビショーで対応して見せる手法、その裏にある熱烈な信奉者、抗議者、離反者たちや女性たちの存在、原油埋蔵量世界一の恵まれた富におぼれ派手な政治・外交に走って経済・財政を着実に衰退させ、国民の生活を混乱させていく状況を、チャベスの性格分析やカストロのさまざまな分野での入れ知恵があったこと、チャベスの13年3月の死の後に腹心マドゥーロが大統領選挙で辛勝したことで、「チャベス無きチャベスモの不吉な始まり」までを丹念に分析している。巻末に訳者の的確な解説が付いて、現代のベネズエラを理解する上で有用な文献の一つ。

(桜井 敏浩)



『ペルソナ・ノン・グラーター ーカストロにキューバを追われたチリ人作家』

ホルヘ・エドワーズ 松本健二訳 現代企画室 2013年9月
464頁 3,200円+税

チリの外交官にして作家である著者は、アジェンデ政権からキューバ代理公使に任命され、1970年12月から翌年3月までハバナに駐在した。有数の名家出身でいわば“チリを代表するブルジュワ族”であるが、左派政権から派遣された外交官でありながらカストロ体制の影の部分に批判的になり、体制に忠実でない者たちとの交流もあったことから、キューバ政府からあたかも“ペルソナ・ノン・グラータ（外交上好ましくない人物）”として何かと目を付けられ、非協力的な対応をされる。

カストロやゲバラ等の忌憚りの無い人物評、各国外交官や作家仲間の人間模様、キューバの経済政策の行き詰まりや社会の分析、さらには73年に軍事クーデタで倒されることになるアジェンデ政権の崩壊につながる内情、カストロの気に入らない作家への抑圧などが、著者の目から克明に記録されている。クーデタ勃発で加筆した原著の初版は1973年10月。

(桜井 敏浩)